



夕からつらつらと飲み始めた酒場では、呼びもしねえのに集まってきた粗雑な冒険者仲間が、がやがやと俺の周りで飲み騒いでいる。がやがやなんて大人しいものではないか。

ごうごうと唸るばかりの銅鑼声の響きが四方八方から響き渡り、バカ声の弾ける様な哄笑が時折鋭く、重なって重なって音の唸りのように変じたバカ会話を掻き消すように突き刺していく。

久々のぐだぐだの雰囲気、じんわりと身を浸して。

サランがいたら、教育的観点からすぐ席を立つか、殴って止めさせるような、下卑たシモシモ会話の渦を聞くともなく聞いていた。

いきなり、どん、と背中を叩かれた。

叩かれた方を見ると、もう酔眼朦朧となりかけている、顔はなんとなく知っていると言うだけの、オマエ名前なんだっけ、と言う冒険者がじつと俺の顔を見つめていた。

「もうサランちゃんがいるオマエにはこの寂しさは判るまい！」

いきなりどんな会話だ。お前は誰とどういう会話をしていたんだ？

全くの脈絡無く、話に巻き込まれてしまった。

ま、酒場でぐだぐだはこっちも歴が長い。適当な返し方は慣れたもの。

「わかるさあ。俺も一人モン長えし。時々サランがお泊まり会とかでない夜とかそんな感じだよ。アレはびっくりするな！びっくりするほど静かで、びっくり

するほどなんか部屋が薄暗いんだ。なんかふと気付くと、早く帰ってこないかなーなんてぼーっと考えてるんだ。今日がそうだから飲みに来た、と言うのが本音だ」

「へっ。俺らはそれが四六時中だ！どうだざまあみろ」
そんな破れかぶれでキレられても。

「うん。まあ、俺は朝まで限定だ。朝まで待てばいい。サランが帰ってくる。もう玄関先で押し倒す」

「朝でしょ？」

背後からフェリシアが？と言った声を出す。

「ああ。朝だ。お泊まり会だからな」

そのフェリシアが呆れたように口を丸く開けた。

サランちゃんも大変ねえ……と、溜息とともに溢した。

その溜息をつくフェリシアの背後に。

いつの間にか男が立っていた。

見るからにカタギじゃない。その手の連中の気配は一目でわかってしまう。

俺らのような、見分けることに長けた、それが職業病でもある冒険者には。

もう、悪臭紛々たる様、と言っても過言ではない。

俺達の目が、うろん、となった。皆、身体から、すっと力を抜いた。ちよつと肩を回し、テーブルに腰の剣がぶつかからないよう、さりげなく椅子をずらした。すらっ、と一瞬で抜けるように。

それに気付いているのかどうなのか。無言で酒場に入ってきた三人の男達は、そろいのすっきりした黒の服を着て、フェリシアを取り囲むように立ち尽くした。かなりいい生地だ。仕立てに金がかかっている。

「アンタだね。フェリシアとかいうビッチは」

先頭の黒服が話し出し、後ろの二人が後に続いた。

「冒険者のようななりをしているとはな……探すのに苦労した」

「随分娼館を回ったぜ。手間暇掛けさせやがる」

「リサーチが足りないだけのお話ではなくって？ なりだけじゃなく、実際、冒険者なのよ。ギルドに行った方が早かったわね」

椅子の上で足を深々と組み、その上に肘を突いた手に顎を乗せ、しつとりと睨むフェリシアは何一つ臆することなく、軽くアオリ返す。

「そんな女聞いたことねえな。大人しくおま○こ商売だけやってりゃいいもんを」

最前列の男が、そんな混ぜっ返した後ろのデブを手で制した。

「随分スケベな腰の振り方を知っているそうじゃないか」

「それはダンスのことかしら。それともオシゴトの方？」

「両方かな。客を取るのは今日限りやめてもらうがな」

この街ではな、と付け足した。

「アンタの噂はウチの街まで響いている。んで……早い話がスカウトだ。組の方で娼館を立ち上げるのに目玉が必要なんだ。どうだ？ 金はいいはずだ。ここでどれだけ稼いでいるか知らんけどな。こんな小さい街よつかウチの方が動く金はデカイ。いい話をお持ちしました、と言うところなんだがね」

「仁義を随分軽く見ているご様子ですが？ ここでも一番の妓楼にお勤めしておりますのよ」

「横車を押し通してこそ……スジもんだろ？……戦争の準備は出来てるさ」

先頭の男がすつとその目のグラスをずらし、身体を屈め、上目遣いにフェリシアの顔を覗き込む。

「長いもんには捲かれる……つて知ってるかな？ 銭と兵隊の規模が違うんだよ。この程度の街の娼館如きとは」

ざらり、と黒服の目が凶悪な輝きを放つ。

「身体に傷を付けるつもりはない。商売もんだからな。だが……全部押し通す。あんたが何をどう言おうともな」

言葉はソフトだったが、その声色には冷たい刃のような響きが含まれていた。

「……言うことを聞かす方法はいくらでもある……世間をちよつと知ってたら……見聞きしたことがあるはずだ……さあ……アンタの頭の良さが試されてるってえわけだ……」

俺の眉が潜^{ひそ}まる。よし。こいつらはバカ確定だ。

酔客の一人が、ぷふつ、と小さく笑った。

「……戦争……ぷふつ……ふーん……」

にやけ顔が次々と俺達の顔に浮かび、んふつ、ふつ、ふつ、ひつ、と、喉奥で小さく笑う声が広がっていった。

それを見て嬉しげにフェリシアもにこりとしている。

「何がおかしい……?」

先頭の男の顔に始めて、怒色が浮かんだ。鼻脇がきゆうと吊り上がり、犬が唸り声を上げるような顔になった。

最前列に腰を下ろし、テーブルに肘を突いて顔を乗せて、リラックスしていた中年冒険者がおかしげに言い放った。

「おかしさ……まだ気付かんのか……?」

三人の男の後ろに……三人とも覆い尽くすように……若手の冒険者達が取り巻いていた。

離れた席で飲んでいた若造達が、手に手に光り物を抜き、忍び寄り、取り囲んでいる。もう喉元には何本ものナイフが横倒しに添えられている。あと一息で喉を掻き切れる位置に。

後方から急所の肝臓を一刺し出来る位置にひたりと突きつけられている。

肋骨を避けるように刃を横倒しにし、ずぶりと心臓に届く位置にも

据えた目の若造達は……昏い殺気を目から放ちながら……岩のように静かに、じつと男達の次の動きを見据えている。

気配を消すのも、足音を完全に殺して忍び寄るのも、一撃で命を奪う所に刃物を突きつけるのも……総て冒険者の得意技だ。

獲物を仕留めるのに特化した、俺達の技能だ。

七八人もいる若い冒険者達は、三人の男達というそれぞれの獲物をひたり、と刃物でマーキングしていた。

「どこのだれと戦争するって? 勝ち目があるって?」

背後から一瞬で喉を掻き切らんとナイフを突きつけている若い衆の一人がその耳元で呟いた。

フェリシアが小さく、うふふつ、と笑った。すごい嬉しそうだ。

よく見ると……これは、フェリシア卒業生の面々か？

うわっっちゃあ……。これは……ヤバいかも。

俺は逆の方に気持ちを切り替えた。いざとなったら止めに入る方向に。

話の転がり方次第では一瞬ですたずたに斬り裂かれた死体が三つ出来上がるだろう。

若いヤツらが据えた殺気に満ちた目で、その黒服男達を視線で刺し殺さんばかりに睨み付け、口々にその低く押し殺した声で唸り倒す。

「ヤクザもんってえだけで……フェリシアさんがモノに出来るってえならなあ！」

「俺ら今すぐんでも、ヤクザやってやんぞ！……ゴルア」

「フェリシア組じゃあ！ 頭下げんかい！」

「俺らを誰だと思つてやがる……普段どんなのと闘ってるか……マンイーターエイプだのてめえらの体の三倍五倍デカい化けモン相手にタマの取り合いしてんじや！……ろくに鍛えてもいねえヒトザル如き、何頭でも狩り取つてやんぜ……おう？」

「右耳切り落として、討伐証明すんぞ……コラ」

ガラわりーなー。オマエら。

完全にチンピラと化した若い冒険者の突きつける刃物に囲まれて……三人の男達の顔が冷や汗で光った。

「お話中に僭越ではございますが……」

静かで重い声が、すうつと通ってきた。酒場の喧噪にも掻き消されることのない不思議な聞こえ方だった。

ふつ、と声の方に視線を向けると……

執事服を着た、一人の老人がすらりと立っていた。

老人と行っても、その髭の見事さがそれを表しているぐらいで、背は高く、身体

は引き締まり、そのからだを一寸の隙も無く執事服で覆っている。脚を揃えてびしりと立ち、白手袋の手を胸に上品に当てている。

目線は鋭くも深く落ち着きを湛え、こんな白刃がギラギラする鉄火場の状況でもいささかも揺らぐことはない。

場数を踏んでいる。軍人上がりか？と思わせた。

「……こちらのお話は既に終了しているのではないかと。であれば、当方の案件を進めさせていただきたく存じます」

「お、お？　なんだジジイ。まだなにも終わっちゃいねえよ！　すっこんでろ！」
バカめ。やはり“読めない”ヤツらだった。見^ケがキかねえ。

ヤクザでそれじゃ長生き出来ねえぞ。

ま、この話流れて、どっかの沼に浮かぶことになっても知ったこっちゃ無いがな。イヤだねえ。この手の世界は。

若造達は対処を保留していた。互いにちらちらと目線を交わす。
が、その目線は必然的に……フェリシアに集まる。

その執事さんを振り向き確認したフェリシアは、小さく口で“大丈夫よ”と形作った。若え衆達にその無言のメッセージは存分に伝わった。

若造達はすつと刃物を引いて、一瞬ではらけていった。離れ際に黒服達の背をどんと突き出し、その執事さんの方に押しやった。

ととと、と押し出された黒服三人はなんとか、体勢を立て直し、執事さんに睨みかかる。

「おう。横入りは止めてもらおうか。まだ話は……」
執事さんがふわりと動いた。型のある拳法のような動きだった。

次の瞬間に先頭の黒服は首裏を押し下げられ、床にうつぶせに這い、背中に捻られ切った腕がばき、と小さな音を立てていた。

もう一步執事さんが脚を進めた瞬間には、もう一人はのど笛を掴むように引き寄せられ、脚を軽く払われて、喉を掴まれた手で床に叩き付けられて、そのまま後頭部を床にごん、と派手に鳴らした。

う、と軽く身構えた残りの一人は……どうやったのか腕を逆手に捻られ、身体を宙にくりりと縦に回され、どん、と腰から落ちた時には捻れた腕も折られていた。

んがああ……と三つの汚い声が床から放たれていた。後頭部から落ちた男の喉に執事さんの靴の踵がどすり、と踏み降ろされ、その内の一つの声が途絶えた。

こいつらも弱いが……執事さんも強い。

「脚を折るのは、寛恕いたしましょう……自らの脚でご退場くださいませ」

「てめえ……何したかわかってんだろうな……俺らがどの誰だか……」

床にべた座りになり、折られた腕を押さえながら何か口走っていた黒服の言葉はそこで途切れた。

本当に軽く振られただけ、そうにしか見えなかったが……執事さんの靴の爪先がその男の顎にかつん、と正面からヒットし、かくりと首を下に向けられ……そのまま、気を失ったのか横倒れに崩れ、沈黙した。

「存じ上げませんし、その必要も無いでしょう。まだ意識のある方は耳に入れておきなさい。ご苦情等ございましたら当家、ガリアニア公家まで。街のチンピラ如きで噛み付けるモノなら噛み付いてみてはいかがでしょうか。くすすっ」
余裕綽々だ。執事さん。く公、とか……言ってなかったか？

もうそのあとは黒服共には一瞥もくれることなく。

執事さんはフェリシアに真っ直ぐ向き合った。

それを見つめているフェリシアも軽く微笑んでいる。なんか旧知の間柄……？……：と言う空気感があった。

「フェリシア・ガル二様……当家人、アーマン・ガリアニアより、言伝を承っております」

すつと伸ばしていた腰をかくり、と折り、懐を探った白手袋が、蠟封をした手紙を恭しくフェリシアの方に差し出した。

え……公爵様からの手紙?? え?

「ガル二は余計です。ナールズマンさんっ。もうっ」

つまらなそうにその手紙を受け取ると、蠟封を切って中から紙を取りだした。かさかさ広げ……なにやら読み込んでいる。

ふう……と、一つ溜息をついた。

「なになに？ フェリシア。何書いてあるん？」

冒険者の何人かがフェリシアに近づき、無遠慮に手紙を覗き込もうとする。恐るべき凶々しさだ。俺は驚愕した。公爵様からの手紙だぞ！

ほら！執事さんもイヤな顔してるっ！

いや！なんでフェリシアがそんなの受け取ってたんだ???

「ダメよ。他の人からのお手紙なんですからっ……のぞいちゃダメ……」

当たり前のことを子供を諭すように言い、すっ、と胸に伏せて隠す。そんな仕草すらどこか艶めいていた。

のぞいちゃダメ……と言う台詞までえろく聞こえる。

「バカ。下がれ。アホ共。執事さんに怒られるぞ」

そう言われて、寄っていったヤツらも渋々引いていった。

床に這っていた黒服共はいつの間にか消えていた。

「お返事は………今？」

「是非とも。我が主が切望しております。わたくしが承るよう、厳命されておりますので」

フェリシアはふう……と溜息をつく、腰の冒険者用小物入れセットから口紅を取り出すと、手紙をテーブルの上に広げ……

でかかど赤い×を書いた。

「ではこちらで。意味は伝わるはずですよ」

執事さんは今日一困った顔で、それを見つめていた。